

安福寺蔵漆棺片考

AMS¹⁴C年代測定・制作技法・部位

A Consideration of the Lacquer Coffin Fragment from the Collection of
Anpukuji Temple: ¹⁴C AMS, Production Techniques and
a Part of the Coffin

岡田文男

OKADA Fumio

はじめに

①安福寺漆棺片の発見経緯

②安福寺漆棺片のAMS分析による¹⁴C年代測定結果

③安福寺漆棺片の材質と制作技法

④安福寺漆棺片の部位について

おわりに

【論文要旨】

本稿では、大阪府柏原市安福寺蔵漆棺片について3点の考察を行った。

1. 安福寺漆棺片より剥落した試料片についてAMS分析法による¹⁴C年代測定を行い、漆棺が6世紀後半から7世紀中頃に制作された可能性が高いことを示した。その結果、同漆棺片を叡福寺北古墳（宮内庁が管理する磯長墓）より出土した棺の一部とする従来の説と矛盾しない年代に納まった。
2. 漆棺より剥落した塗膜の断面を顕微鏡観察し、漆棺の制作技法を検討した。その結果、安福寺漆棺片の胎が絹布層と火山灰を主材料とする地粉層を交互に塗り重ねた構造からなること、絹布の織りは均一でなく、繊維断面の形状も一定せず、繩の可能性が高いことを明らかにした。
3. 棺台ならびに漆棺の法量が明らかな阿武山古墳出土漆棺（終末期古墳）、法隆寺五重塔初層西面金棺における棺台長と棺身長の比率の比較をもとに、磯長墓棺台に載る漆棺の法量を推定した。その結果、阿武山古墳漆棺における幅/長さ比をもとにすると、磯長墓棺の推定棺蓋長は217.8cm、同様に棺身長は210cm、棺身幅は83.2cmとなった。次に、法隆寺五重塔初層西面における金棺の法量比を同様にして当てはめると、棺蓋長は196cm、棺身長は193.6cm、棺身幅は60.2cmとなった。最後に、安福寺漆棺片の棺身長を、既知もしくは記録により棺身長と棺幅長を推定できる漆棺の幅/長さ比と比較した。その結果、安福寺漆棺片を仮に短辺と考えると、長辺が3メートル近くに復元され、既知の棺台に載らず、漆棺の長辺の一部と考察するのが妥当であるとの結論に至った。

【キーワード】安福寺漆棺片、磯長墓、阿武山古墳、繩（あしぎぬ）

はじめに

2017年夏、国立歴史民俗博物館において『企画展 URUSHI ふしぎ物語』が行われた〔国立歴史民俗博物館編2017〕。総数673点の漆製品の一つとして大阪府柏原市玉手山安福寺に伝わる漆棺片（以下、安福寺漆棺片と略）が展示された。この安福寺漆棺片は1958（昭和33）年夏に発見され、1973（昭和48）年に詳細な報告が行われ、世に知られるようになったものである。〔猪熊1973〕

筆者は、安福寺ご住職の大崎信宥氏のご厚意により、2007年にこの安福寺漆棺片の塗膜構造調査を行う機会を賜った。その調査結果をもとに、安福寺漆棺片の芯材（胎）が絹布であり、それに関して従来の「夾紵棺」の呼称を用いることが不自然であること、さらに部位についても漆棺の身の短辺とする従来の見解に対して身の長辺と考えるのが妥当であることを指摘した〔岡田2007〕。しかしながら、その後も安福寺漆棺片を「夾紵棺」の一部とし、部位についても漆棺の身の短辺とする見解が続いている〔柏原市立歴史資料館編2010〕、〔高槻市立今城塚古代歴史館編2012〕。

そこで今回、筆者は安福寺漆棺片についてさらに正確に把握する必要性を考え、AMS法による¹⁴C年代測定により安福寺漆棺片の制作年代を絞り込み、制作技法および部位についても再度、検討を加えることとした。

以下はその結果である。

①……………安福寺漆棺片の発見経緯

安福寺漆棺片は、1958年に関西大学考古学研究室が大阪府柏原市玉手山古墳群にある玉手山5号墳の調査を行った際に発見されたもので、来歴未詳とされている。安福寺漆棺片は現状で板状を呈しており、長辺の残存長約98cm（写真2の赤矢印で示した底辺と右端はそれぞれ内側に折れ曲がり、上辺、左端に折れがなく、側板の一部とみなしうる）、短辺約50cm、厚さ約3cm、重量17.73kgと、漆製品として非常に大きく、かつ重厚である（写真1、2）。

発見者の猪熊氏は、同寺に近接する大阪府南河内郡太子町に所在する叡福寺境内に「磯長墓」があること、1879（明治12）年に宮内庁によりこの墓の修理が行われ、そこから漆棺片が出土したとする大沢清臣、六村中彦両氏による『聖徳太子磯長墓実検記』〔梅原1921〕の記録をもとに、安

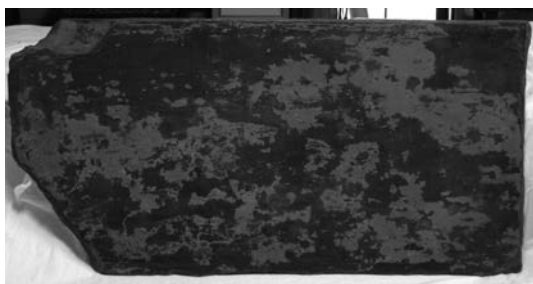


写真1 漆棺の外観（筆者撮影、以下同様）

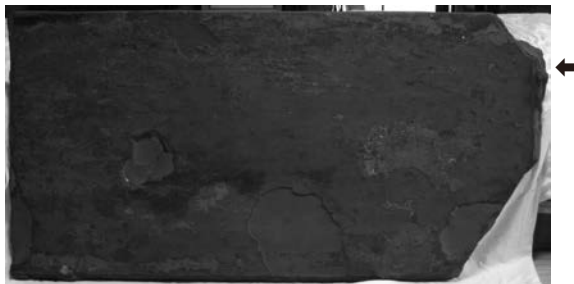


写真2 漆棺の内面

福寺漆棺片を「磯長墓」に関連するものと指摘している。大沢・六村両氏による報告の一部を示すと、

(略) 隧道ノ口ヲ開クレハ其高六尺四寸、廣六尺、長二丈四尺許ニシテ奥ニ石室アリ、高廣各一丈、長一丈八尺許ナリ、而シテ其隧道ノ左右ハ大石四枚ヲ以テ築並ヘ蓋フニ三石ヲ以テセリ又石室ハ左右大石各五枚奥ハ二枚ヲ以テ築上ケ蓋フニ亦大石二枚ヲ以テセリ而シテ其最奥ノ正面及ビ左右ニ石三枚ヲ据ヘタリ正面ノ一枚ハ高一尺六寸、長六尺六寸幅二尺五寸許アリ、其平面ノ正中ヲ手水鉢ノ如ク深六寸許ニ彫リ左右漸ク深クシテ八寸餘アリ左右ノ横方ニ水抜ノ如ク孔ヲエリタリ其仔細詳ナラス又右ニ据ヘタル一箇ハ正面ノ石ヨリ三尺五寸許離レテ前東方ニヨセテ西面ニスエタリ高二尺二寸、長八尺、幅三尺六寸五分、左ニアル一個ハ西方ニヨセテ右ナルニ相對シテ東面ニ居^{すえ}タリ高二尺二寸、長七尺一寸五分、幅三尺アリ、此左右ニ相對スル二箇ハ上面平ナリ且此三箇ノ石ハ皆切石ニテ側面ハ禮盤ノ側面ノ如ク彫レリ、又此石ノ邊ニ箱ノ破碎シタル如キ板ノ腐朽セルアリ搔キ集ムルニ凡二斗許アリ、日光ニ照シミルニ布張黒漆ノ箱ノ腐朽シテ如此ナレルナリ、是全ク御棺ノ破碎セルモノ歟、凡室内ノ状カクノ如クニシテ他ニ異常ナシ (以下略)。

とある。

この記事によると、磯長墓の石室内には正面（北）に高さ1尺6寸、長さ6尺6寸、幅2尺5寸の石製棺台があり、その平面の正中を約6寸彫り下げ、その左右を約8寸下げ、それぞれの横に水抜き孔があったこと、また正面の石製棺台より約3尺5寸手前に離れた右側（東）に高さ2尺2寸、長さ8尺、幅3尺6寸五分、左側（西）に高さ2尺2寸、長さ7尺1寸五分、幅3尺の石製棺台が相對しておかれていたことがわかる。石製棺台の周辺に破碎した箱が板状に腐朽していたことから、それらを集めたところ、約2斗になったこと、それらを太陽光の下で観察したところ、布張り黒漆塗の箱の腐朽したものであったことがわかる。『聖徳太子磯長墓実検記』に記された石製棺台の位置関係を示せば図1になる。

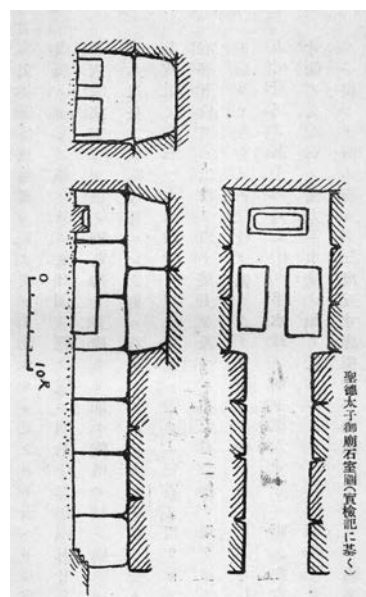


図1 実検記に基づく石室内概念図 [梅原1921より転載]

②……………安福寺漆棺片のAMS分析による¹⁴C年代測定結果

安福寺漆棺片の材質ならびに制作技法を明らかにする目的で、2007年に筆者は塗膜片の材質調査をさせていただいた。同寺において、遺物から剥落していた微小片を採集させていただき、その一部を薄片にして顕微鏡観察に用いた。細片の残部については2018年9月に、(株)パレオ・ラボに加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を依頼した(写真3)。測定試料の情報、調製データを表1に示す。加速器質量分析計は(パレオ・ラボ, コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)による。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正後、較正した年代範囲は図2に示すごとく、1σ暦年代範囲で575-620 cal AD (68.2%), 2σ暦年代範囲で563-641 cal AD (95.4%)となり、漆棺の制作年代は6世紀後半から7世紀中頃に絞られた。

表1 放射性炭素年代測定試料ならびに暦年較正の結果 (株)パレオ・ラボによる)

試料	安福寺漆棺				
前処理	超音波洗浄, 有機溶剤処理; アセトン, 酸, アルカリ, 酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1.0N, 塩酸 1.2N))				
放射性炭素年代測定結果	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
	-29.05 \pm 0.10	1466 \pm 19	1465 \pm 20	1σ暦年代範囲 575-620 AD (68.2%)	2σ暦年代範囲 563-641 AD (95.4%)

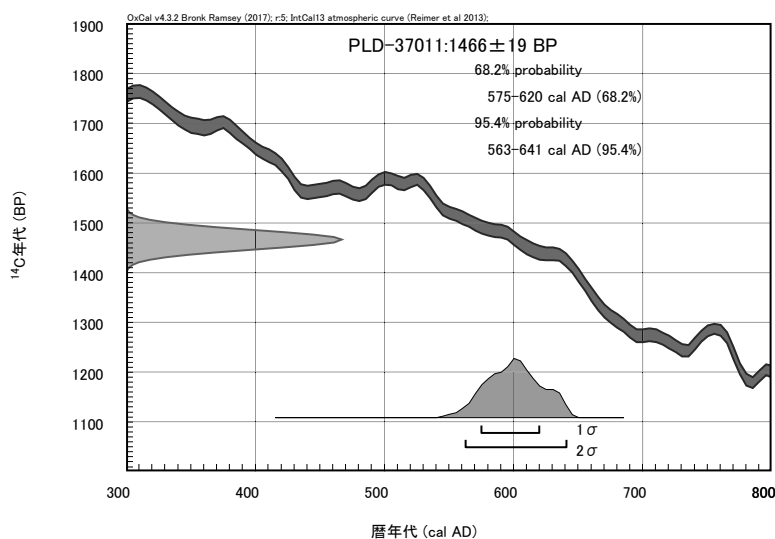


図2 AMS分析による安福寺漆棺の年代測定結果 (株)パレオ・ラボによる)

③ 安福寺漆棺片の材質と制作技法

安福寺漆棺片の材質についてはすでに絹布を漆で42枚程度貼り重ねた構造であると報告されている[猪熊1973]。2007年に筆者がおこなった分析結果も概ねそれを追認したものである。以下に2007年の結果を踏まえ、顕微鏡観察により、目視による観察結果との対応関係、布の材質を再検討した結果を述べる。

写真4は漆棺内面の上端中央よりやや左方の、表層の布が剥離してその下の新鮮な布面がみえる部分を拡大した結果である。布は全面が漆に覆われているが、平織りで糸の太さ、織りとも均一でない。織り密度は場所により粗密があり、比較的密な部分で経約40本/cm、緯約30本/cmである。

写真5は安福寺漆棺片の断面を示したものである。写真5により、漆を塗り重ねた層が、あたかも木材の柾目面のごとき様相を呈していることが認められた。写真6は採取試料の断面を薄片にして観察したものであり、絹布を漆で塗り固めた層と、地粉と漆を混練した地粉層を交互に塗り重ねていることがわかる。ここで、写真5・写真6において観察された層の重なりを比較すると、写真5において木の柾目面のごとくにみえた1層分の厚さは計測部位によって差があるものの、約1mm弱となっている。それを写真6における絹布層と地粉層の1単位を合わせた厚さと比較すると、両者



写真3 分析に供した漆棺の微小片 (スケール: 1mm)

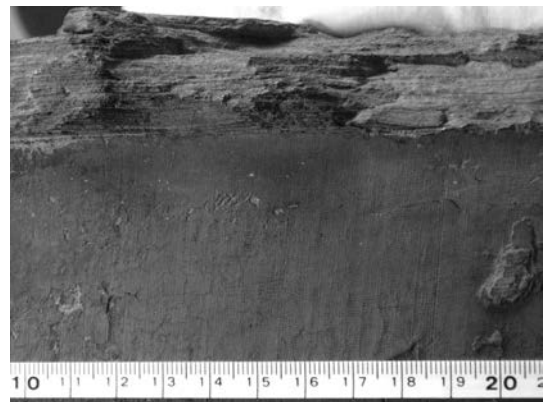


写真4 漆棺の内面に貼られた布の拡大 (↓経糸の方向)

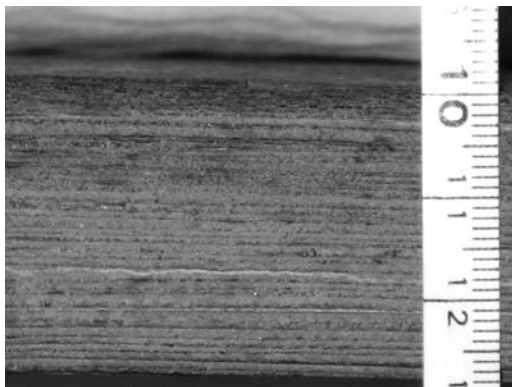


写真5 安福寺漆棺片の断面にみられる漆層の単位



写真6 試料断面の顕微鏡写真

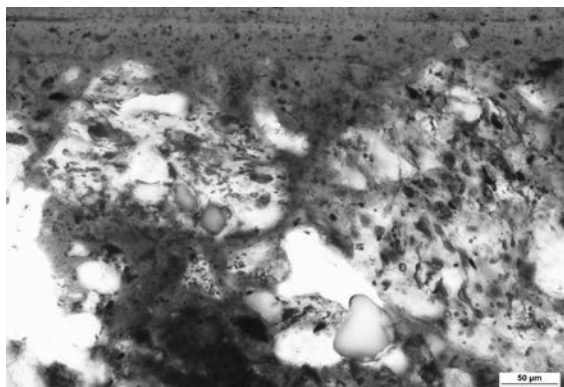


写真7 塗膜断面の地粉層に含まれる粒子(透過光)

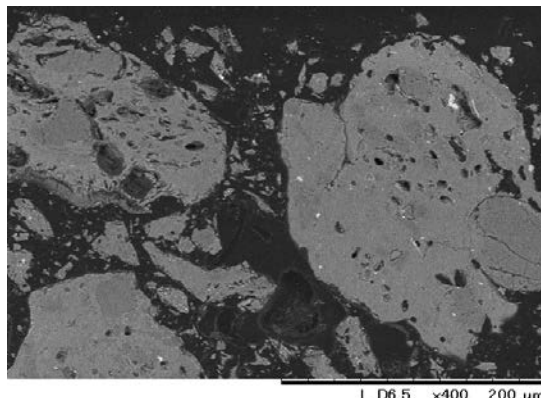


写真8 地粉層に含まれる粒子(反射電子像)

の厚さがほぼ対応していることがわかる。それにより、絹布が40層以上貼られていることが確認できるのである。さらに、それぞれの層の厚さは均一であり、その上面に透漆を2層程度塗り重ね、表面を非常に平滑に仕上げていることがわかる。通常の漆製品であれば、写真に示した塗装の1単位が1製品の全塗装工程に相当するのである。写真7は写真6における地粉層を拡大したものであり、画面の左方に表面が斑状になった粒子がみえている。写真8は地粉層を走査型電子顕微鏡によって観察した反射電子像であり、多孔質の粒子で構成されている。写真9は写真8と比較するために提示した1977年から78年にかけて北海道有珠山の噴火で降下した火山灰である。写真10はその断面を透過光下、また写真11は走査型電子顕微鏡下において観察したものである。写真に示したように火山灰の断面は非常に多孔質であり、写真8の断面にみられる粒子断面の形状と酷似している様子⁽²⁾がわかる。

写真12は布層の経糸と緯糸の重なり部分を拡大したものであり、写真中央に人眼形をした糸1本分の横断面がみえる。この糸を構成する単繊維の断面径は10数μmで、不等辺三角形を呈しており、その形状は絹繊維の特長を示している。写真13に示した単繊維の断面形状は不均一で、それぞれが分散する傾向にある。写真14は現代の家蚕を用いた手織による平絹の断面であり、単繊維の断面は丸みのある不等辺三角形で2本一対となっている⁽³⁾。ちなみに『令義解』賦役令第十に「凡調絹純謂細爲絹也
鹿爲純也絲綿布並隨郷土所出」とあり、細布を絹、鹿布を純(あしぎぬ)として区別したことが知られている。安福寺漆棺に貼られた絹布は織り、糸の太さ、単繊維の分散や形状が均一と言い難く、『令義解』賦役令で規定された純にあたる可能性が高い。ちなみに、奈良時代の純については絹と純に顕著な差はみられないとする知見[布目1988]が示されているが、本例はそれを約100年遡るものであり、絹製品における製糸・製織技術の発展途上の姿をとどめている可能性がある。

④……………安福寺漆棺片の部位について

4.1 猪熊氏による安福寺漆棺片の部位の推定

安福寺漆棺片の部位については従来、磯長墓棺との関係をもとにした考察が行われ、以下の結論が導かれている[猪熊1973]。

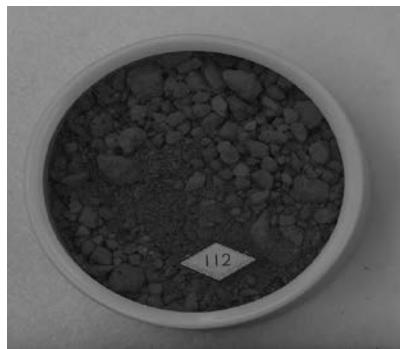


写真9 火山灰(有珠火山・火砕物)

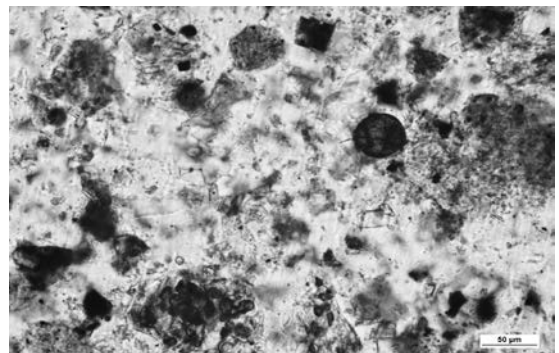


写真10 火山灰の粒子断面(透過光)

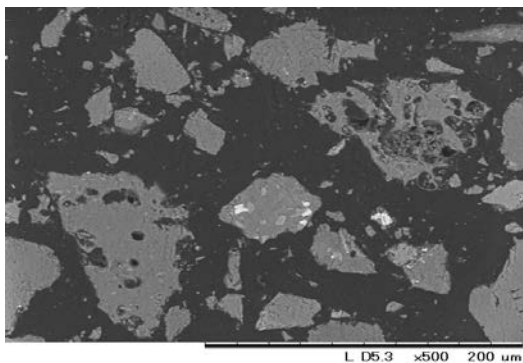


写真11 火山灰の粒子断面(反射電子像)

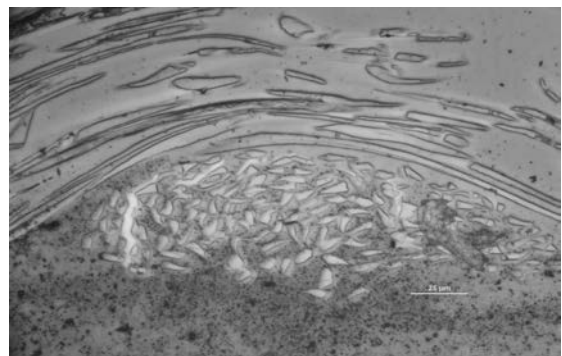


写真12 絹布層の絹糸

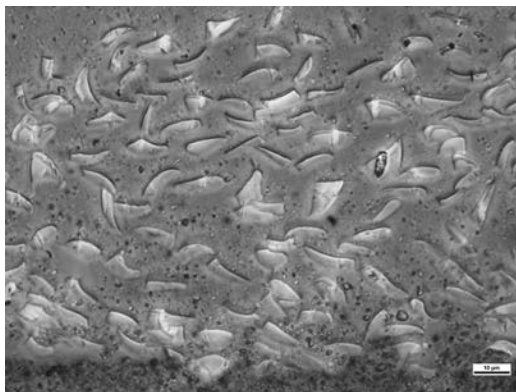


写真13 糸断面の拡大

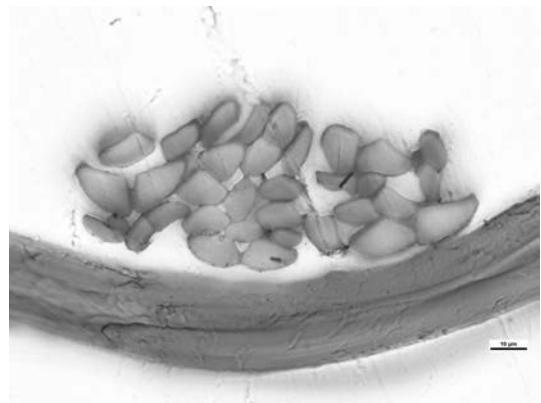


写真14 現代の平絹(家蚕・手織)の断面

阿武山古墳の夾紵棺は長さ一九八センチ、幅六二センチで、完全な寸法がわかる。棺台は長さ二二五センチ、幅九〇センチを測り、棺台は棺より長さ、幅ともひとまわり大きい。八世紀前半の製作になる法隆寺五重塔塑像西面の金棺も棺台が大きい。阿武山古墳以外の棺は棺台より復元した寸法である。実際はいくらか小形をしていたのであろう。安福寺の夾紵の板を比較すれば、磯長墓の棺身の木口部分に近い数値を示している。安福寺蔵の夾紵の板は夾紵棺の身の木口部分と考える。

とするものである。

表2 終末期古墳より出土した棺台の法量

	長さ (cm)	幅	幅 / 長さ比	備考
磯長墓東棺台	8 尺 (242.0)	3.65 尺 (109.5)	0.46	『聖徳太子磯長墓実検記』
磯長墓西棺台	7.15 尺 (216.5)	3 尺 (91.0)	0.42	『聖徳太子磯長墓実検記』
アカハゲ古墳	186.0	66.0	0.35	漆喰による長方形区画
牽牛子塚古墳棺台	193.5	78.7	0.41	『牽牛子塚古墳』

〔猪熊 1973〕を改編。幅 / 長さ比は筆者による (単位:cm)。

終末期古墳から出土した漆棺のほとんどは断片である。そのため、安福寺漆棺片の部位を推定するにあたり、比較検討可能な資料は表2のごとくに限られる。

筆者は安福寺漆棺片の部位を漆棺の長辺と考察するものであるが、その理由は4.2以下による。

4.2 安福寺漆棺片の部位を特定するための基礎作業

安福寺漆棺片の部位を考えるにあたり、筆者は「摂津阿武山古墓調査報告」〔梅原 1936〕に報告された阿武山古墳出土の漆棺、法隆寺五重塔塑像西面の金棺〔奈良六大寺大観刊行会編 1969〕を取り上げる。そのなかで、後者の金棺は背面が壁に埋まった形状であることから、金棺において厳密に比較できるのは棺台と棺蓋長、棺身長の関係のみとなる。それらをもとに、磯長墓漆棺の棺長、棺幅を復元したときに、安福寺漆棺片の部位とどのように関連するか、以下に検討を加える。

4.2.1 阿武山古墳における棺台と漆棺の法量比

阿武山古墳石室内における棺台と出土した漆棺の法量について、「摂津阿武山古墓調査報告」中に掲載された図版第11(図3)をもとに棺台の長さ⁽⁴⁾と幅を復元した上で、棺蓋、棺身について、棺台に対する長さおよび幅の比較を試みた。

その結果、表3に示すごとく、棺台の長さは約7.45尺(225.8cm)、棺台の幅は2.7尺(82cm)となった。その結果、棺台の長さに対する幅の比は0.36となった。同様に、棺蓋のそれは0.34、棺身のそれは0.32となり、長さに対する幅の比はすべて0.3台となった。ちなみに棺蓋と棺身では長さ、幅とも2寸の差があることから、蓋は約1寸、身よりも大きく作られたことになる。

4.2.2 法隆寺五重塔初層西面金棺の法量

図4左は法隆寺五重塔初層西面金棺の正面観の見取図であり、同右はその側面観である。側面観によると棺の半分近くが壁に埋め込まれた形状をしており、棺台、棺とも幅について厳密な比較を行うことは困難であるが、棺の短辺方向が半分近く壁に埋め込まれたものと仮定し、見取図にある数値(棺台幅の16.1cmを含む)をそのまま概算として用いることにする。その結果、表4に示すごとく、棺台に対する棺蓋の長さの比は0.81、棺台と棺身のそれは0.8となった。さらに、棺蓋の長さに対する幅の比は0.36、棺身のそれは0.33となった。以上、棺の長さに対する幅の比は概算で0.3台におさまり、阿武山古墳のそれと比較して大差ない結果となった。

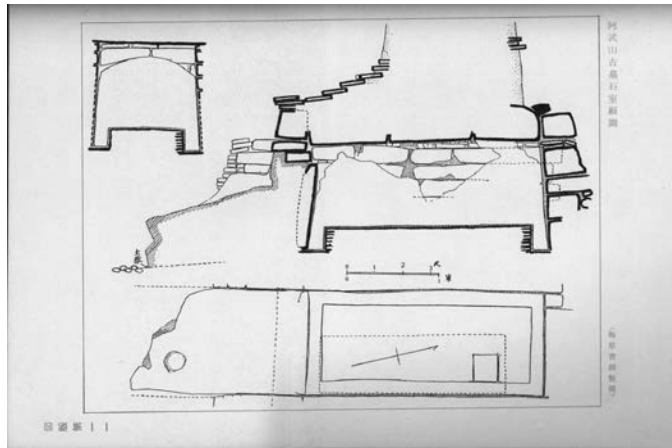


図3 阿武山古墳石室細図
 (「摂津阿武山古墳調査報告」図版第 11 より転載)

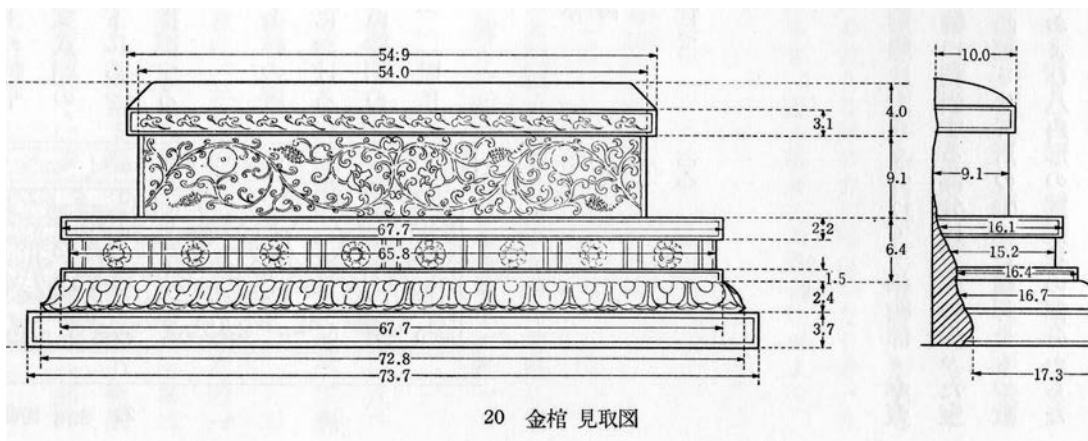


図4 法隆寺五重塔初層西面金棺見取図
 (『奈良六大寺大観法隆寺三』1969, 33頁より転載)

表3 阿武山古墳における棺台・棺蓋・棺身法量換算表 (単位: 1尺=30.3cm)

阿武山古墳における棺台 ならびに棺の法量	長さ (cm)	(長さ / 棺台)	幅 (cm)	(幅 / 棺台)	幅 / 長さ比
棺台 (図版 11 による筆者換算値)	7.45 尺 (225.8)	1.00	2.7 尺 (81.8)	1.00	0.36
棺蓋	6.7 尺 (203)	0.90	2.26 尺 (68.5)	0.84	0.34
棺身	6.5 尺 (197)	0.87	2.06 尺 (62.4)	0.76	0.32

(「摂津阿武山古墳調査報告」図版 11 をもとに筆者作成。以下の表は筆者による。)

表4 法隆寺五重塔初層西面金棺の法量と対棺台比および幅 / 長さ比

金棺の法量	長さ (cm)	/ 棺台比	幅	/ 棺台比	幅 / 長さ比
棺台	67.7	1.00	33.0	1.0	0.49
棺蓋	54.9	0.81	20.0	0.61	0.36
棺身	54.0	0.80	18.2	0.55	0.34

表5 阿武山古墳，法隆寺五重塔初層西面金棺をもとにした磯長墓漆棺の推定値

磯長墓漆棺の推定法量	磯長墓棺台		棺蓋の推定値 (/棺台比)	棺身の推定値 (/棺台比)
阿武山古墳における漆棺の法量比をもとに推定した磯長墓漆棺の法量	長さ	242cm	217.8cm (0.90)	210cm (0.87)
	幅	109.5cm	83.2cm (0.76)	75.6cm (0.69)
	幅/長さ	0.45	0.38	0.36
法隆寺五重塔初層西面金棺における漆棺の法量比をもとに推定した磯長墓漆棺の法量	長さ	242cm	196cm (0.81)	193.6cm (0.80)
	幅	109.5cm	66.8cm (0.61)	60.2cm (0.55)
	幅/長さ	0.45	0.34	0.31

4.2.3 漆棺長 / 棺台長比より推定した磯長墓漆棺の法量

4.2.2において阿武山古墳，法隆寺五重塔初層西面の金棺の棺台に対する棺蓋長，棺身長を幅と長さの比をもとに，それらを磯長墓棺台に援用し，漆棺の法量を比較したのが表5である。その結果，表5に示すごとく，阿武山古墳漆棺における幅と長さの比をもとに磯長墓漆棺の法量を推定復原すると，同棺の推定棺蓋長は217.8cm，同様に棺身長は210cmとなり，棺蓋幅は83.2cm，棺身幅75.6cmとなった。ついで，法隆寺五重塔初層西面における棺台と金棺の法量比を同様にして当てはめると，棺蓋長は196cm，棺身長は193.6cmとなり，棺蓋幅は66.8cm，棺身幅は60.2cmとなった。

4.2.4 漆棺長と漆棺幅の比をもとにした安福寺漆棺片の部位

次に，終末期古墳より出土した漆棺について，記録を含めた漆棺長と漆棺幅の法量について，猪熊兼勝氏による集成〔猪熊1973〕をもとに，一部筆者が追加し，棺の長さに対する幅の比を換算した結果を表6に示す。その結果，表6によれば漆棺の長さに対する幅の比は0.29，0.32，0.36の範囲に収まった。その結果をもとに安福寺漆棺片の棺幅を現存長98cmに3cmを加えて仮に101cmとして棺長を推定すると，表7に示すごとく，棺長は280cmから348cmの範囲の数値が得られた。

表6，表7の結果をもとに棺の長さとの関係をグラフに表すと，図5のごとくなる。その結果，安福寺漆棺片の復元棺長は最小でも280センチとなり，安福寺漆棺を漆棺の長辺と考えざるを得ないのである。

おわりに

本稿では大阪府柏原市に所在する安福寺漆棺片について，AMS法による¹⁴C年代測定の結果を提示した。その結果によれば，安福寺漆棺片の制作年代は1σ暦年代範囲で575-620cal AD (68.2%)，2σ暦年代範囲で563-641cal AD (95.4%)となり，6世紀後半から7世紀中頃までにおさまった。ついで筆者は2007年に行った安福寺漆棺片の薄片について，顕微鏡観察を再度行うことにより，芯材(胎)の構造は漆を塗布した絹布層と，漆と地粉を混練した地粉層を交互に塗り重ねたものであり，それが表面から木目のごとくにみえる層と対応していること，地粉には火山灰が混和されていること，絹布は繩の可能性が高いことをあらたに指摘した。従来，布を胎とする漆棺を一様に「夾紵棺」と呼称してきたが，「紵」は植物繊維の苧麻の意味であることから，筆者は同

表6 終末期古墳より出土した漆棺の棺台ならびに漆棺の法量

古墳名	漆棺長	漆棺幅	棺の幅/長さ比	備考
御坊山三号墳陶棺	150	44	0.29	漆塗陶棺
高松塚古墳漆棺	200	58	0.29	漆塗木棺
初田二号墳 (推定)	220	70	0.32	推定
阿武山古墳漆棺・棺身	197	62.4	0.32	「撰津阿武山古墓調査報告」
野口王墓漆棺 (記録のみ)	210	75	0.36	『阿不幾乃山陵記』 ⁽⁵⁾
牽牛子塚漆棺 (推定)	180	65	0.36	『史跡牽牛子塚古墳』記載推定値 [米田 1977]

[猪熊 1973] を改編。

表7 表6における棺の幅/長さの比をもとに推定した安福寺漆棺片の棺長

安福寺漆棺 (101 cm) を棺幅と仮定したときの推定棺長	表6をもとにした幅/長さ比	幅/長さ比をもとにした棺の復元長 (cm)	比較のもととなった漆棺
安福寺 a 案	0.29	348	高松塚古墳漆棺, 御坊山 3 号墳陶棺
安福寺 b 案	0.32	315	阿武山古墳漆棺, 初田 2 号墳
安福寺 c 案	0.36	280	野口王墓漆棺, 牽牛子塚古墳

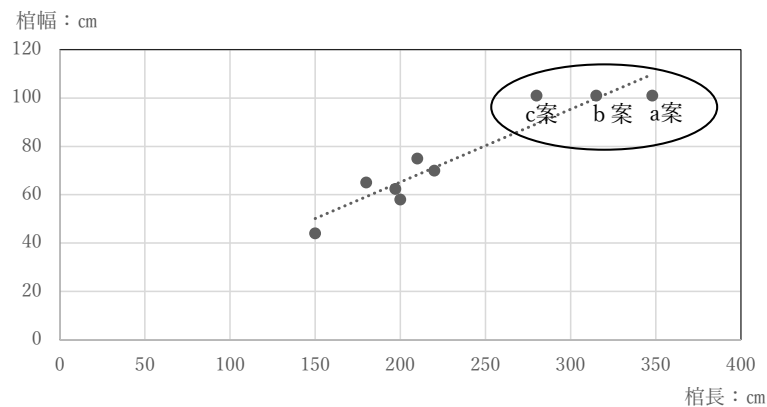


図5 表6, 表7にもとづく漆棺の棺長と棺幅の分布 (円内は安福寺漆棺片を短辺と推定したときの長辺の分布範囲)

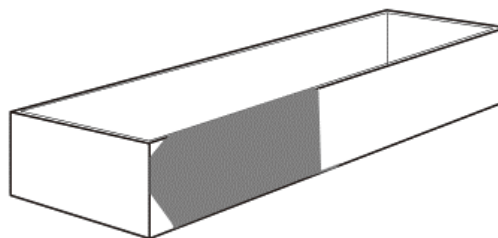


図6 筆者による安福寺漆棺片の推定部位

漆棺を「夾紵棺」と呼称するのは妥当でなく、奈良時代の呼称に従い「塞棺」としておくのが妥当と考察するものである。さらに安福寺漆棺片の部位を阿武山出土漆棺、法隆寺五重塔西面金棺、終末期古墳より出土した既知の漆棺の法量と比較検討した結果、同漆棺片を身の短辺とすると、既知の棺台に載らず、漆棺の身の長辺の一部と考察するのが妥当であるとの結論に至った。

謝辞：安福寺漆棺片の調査にあたり、試料の提供を賜った安福寺ご住職の大崎信宥氏に心より御礼申し上げる次第である。本研究の一部は科学研究費補助金（平成26年度基盤研究（C）課題番号：26350381）によるものである。

註

(1)——筆者は2019年9月17日、柏原市立歴史資料館において、安福寺住職大崎信宥氏、安村俊史資料館長、柏原市文化財課主査山根航氏の立会いのもとに、同館に寄託されていた安福寺漆棺片の寸法および重量の計測を行った。重量の測定には隔測式デジタル台秤 SF890 を用いた。当日の寸法は漆棺片の最大長が約98cm、最大幅が約50cm、厚さが約3cm、重量は17.73kgであった。

(2)——本稿を提出後、奈良県香芝市に所在する二上山山麓の火山灰堆積層（天然記念物 どんづる峯）の火山灰粒子の断面を観察した結果、安福寺漆棺中のそれと同様に多孔質であることが判明した。

(3)——写真14に示した家蚕の単繊維の断面形と写真13のそれとを比較すると、繊維断面の形状は大きく異なっており、写真13の繊維断面は全体に扁平な印象を受ける。その原因については未詳であるが、当時の養蚕技術や製糸技術については不明な点が多く、今後解決す

べき課題といえる。

(4)——「摂津阿武山古墓調査報告」梅原（1936）には棺蓋、棺身の長さや幅の記載があるのみで、棺台の寸法は未詳であった。さらに報文にある棺蓋の数値をもとにした棺蓋の幅／長さ比と、図面上のそれとは数値が一致せず、図面は見取り図であると判断した。そこで図版第11をもとに、棺蓋と棺台の比率から棺台長と棺台幅を算出したため、棺台の算出値はあくまでも机上の数値にとどまるが、今回の考察を進めるうえでの支障はないものと考えた。

(5)——野口王墓漆棺の寸法は奈良文化財研究所編『奈良文化財研究所創立50周年記念 飛鳥・藤原京展』120頁、朝日新聞社、2002に掲載された『阿不幾乃山陵記』の読み下し文「御棺は張物也、布を以てこれを張る、入角也、朱塗、長さ七尺、広さ二尺五寸許、深さ二尺五寸許也、（以下略）」より算出した。

引用参考文献

- 国立歴史民俗博物館編. 2017. 企画展 URUSHI ふしぎ物語.
猪熊兼勝. 1973. 夾紵棺 —玉手山安福寺蔵品に関連して—. 論集 終末期古墳. : 211-240. 塙書房.
岡田文男. 2007. 絹布を貼り重ねた漆棺の制作技術について. 漆工史. 30 : 40-45.
柏原市立歴史資料館編. 2010. 群集墳から火葬墓へ —河内の終末期群集墳—. : 38-39.
高槻市立今城塚古代歴史館編. 2012. 阿武山古墳と牽牛子塚 —飛鳥を生きた貴人たち—. : 29.
梅原末治. 1921. 聖徳太子磯長の御廟. 聖徳太子論纂. : 344-370. 平安考古會.
布目順郎. 1988. 絹と布の考古学. : 50. 雄山閣.
米田文孝. 1977. 牽牛子塚古墳出土夾紵棺の復原. 史跡 牽牛子塚古墳. : 48.
梅原末治. 1936. 摂津阿武山古墓調査報告. 大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第七輯. : 1-30.
奈良六大寺大観刊行会編. 1969. 奈良六大寺大観 法隆寺三. : 33. 岩波書店.

(京都芸術大学歴史遺産学科、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2019年5月28日受付, 2019年10月7日審査終了)

A Consideration of the Lacquer Coffin Fragment from the Collection of *Anpukuji* Temple: ¹⁴C AMS, Production Techniques and a Part of the Coffin

OKADA Fumio

I investigated on the lacquer coffin fragment belonging to *Anpukuji* Temple of Kashiwara-shi, Osaka-fu, in this study. Through an AMS (Accelerator Mass Spectrometry) analysis method, I performed carbon-14 dating on a sample fragment that had peeled off from the *Anpukuji* Temple's lacquer coffin fragment and found that it was highly possible that the lacquer coffin was made between the late 6th Century and the middle of the 7th Century. The resulting time period does not contradict the hitherto viewpoint that this lacquer coffin fragment was a part of the coffin excavated from the *Eifukuji* Temple Kita Kofun (a *Shinaga grave* managed by the Imperial Household Agency). Further, I observed a section of the coating film that had peeled off from the lacquer coffin through a microscope and assessed its production technique; consequently, I noted that the material of the *Anpukuji* Temple's lacquer coffin fragment was made up of a structure created by painting layers upon layers, alternating between silk cloth and soil powder that contained volcanic ash as the main ingredient. I noted that the fabric of the silk cloth is uneven and the shape of the fiber section is not fixed, thus concluding that this fragment is *ashiginu* (a cloth woven with thick thread). I estimated the measurements of the lacquer coffin that would go on the *Shinaga grave* coffin platform on the basis of comparisons with the coffin's length to coffin's platform length ratio of the lacquer coffin excavated from the *Abuyama* Kofun (Shuumatsuki Kofun) and the golden coffin from the first layer on the west side of the *Horyuji* Temple Five-story Pagoda, whose coffin's length and coffin's platform length are known. Thus, using the width/length ratio of the lacquer coffin of the *Abuyama* Kofun as the basis, the estimated coffin lid length of the *Shinaga grave* coffin was 217.8 cm, the coffin length was 210 cm, and the width was 83.2 cm. Next, using the measurement ratio of the golden coffin in the west first layer of the *Horyuji* Temple Five-Story Pagoda, the estimated coffin lid length was 196 cm, the coffin length was 193.6 cm, and the coffin width was 60.2 cm. Finally, I compared the coffin length of the *Anpukuji* Temple lacquer coffin fragment to the width/length ratio of lacquer coffins for which I could estimate coffin lengths and widths through existing knowledge or records. As a result, if we think of the *Anpukuji* Temple lacquer coffin fragment as being a part of the shorter side, the longer side would be reconstructed as nearly 3 m long, and the coffin would not fit on the known coffin platform. Therefore, I deduced that the fragment can be considered as a part of the longer side of the lacquer coffin.

Key words : *Anpukuji* Temple's lacquer coffin fragment, *Shinaga grave*, *Abuyama* Kofun, *ashiginu*



写真1 漆棺の外表面 (筆者撮影, 以下同様)



写真2 漆棺の内表面



写真3 分析に供した漆棺の微小片 (スケール:1mm)



写真4 漆棺の内表面に貼られた布の拡大 (↓経糸の方向)



写真5 安福寺漆棺片の断面にみられる漆層の単位



写真6 試料断面の顕微鏡写真

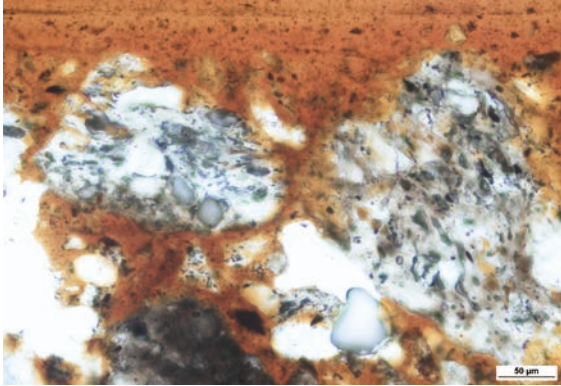


写真7 塗膜断面の地粉層に含まれる粒子(透過光)

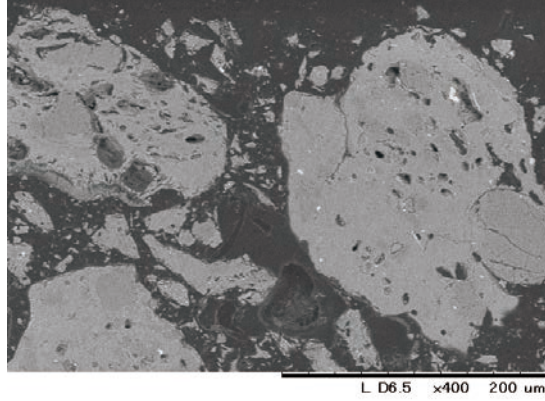


写真8 地粉層に含まれる粒子(反射電子像)

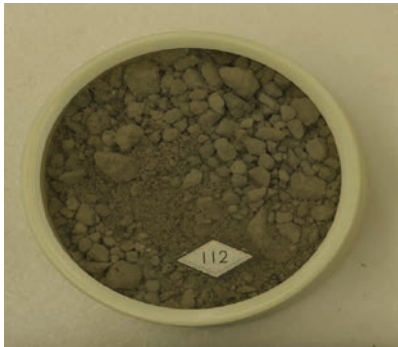


写真9 火山灰(有珠火山・火砕物)

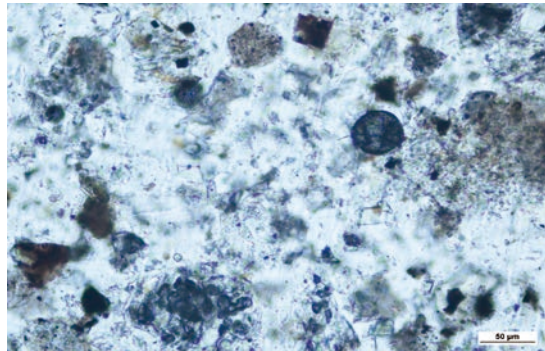


写真10 火山灰の粒子断面(透過光)

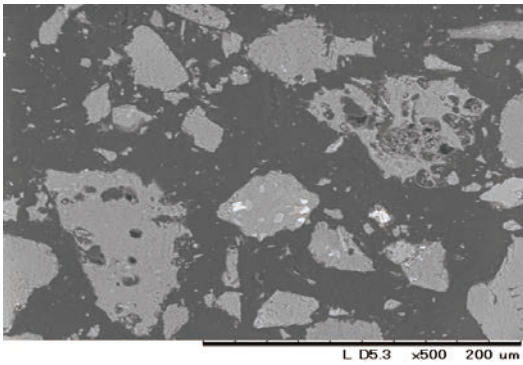


写真11 火山灰の粒子断面(反射電子像)

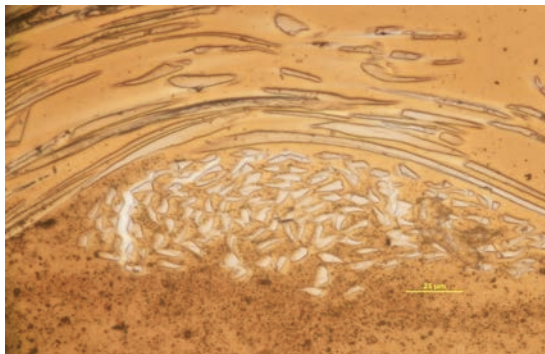


写真12 絹布層の絹糸

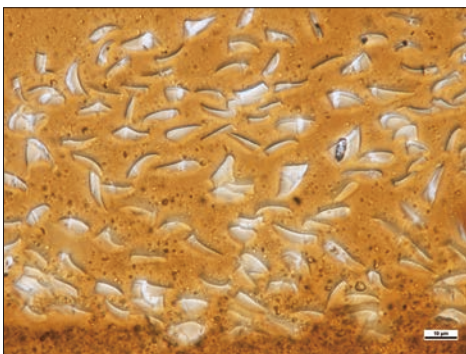


写真13 糸断面の拡大

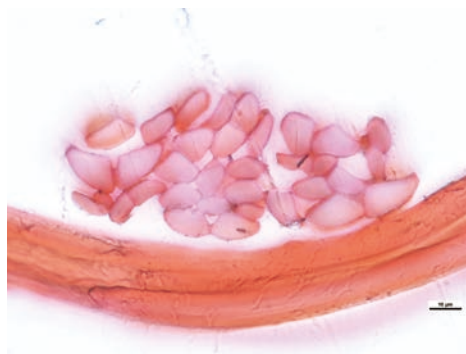


写真14 現代の平絹(家蚕・手織)の断面